



「四つのテスト」に対する愚見

2017-18年度 国際ロータリー第2710地区 パストガバナー 岡田 幹矢

私はロータリーの「四つのテスト」を唱和する度、このままの文言でロータリーの金看板として使い続けていいのか、いつも疑問に思っている偏屈者である。

シカゴの実業家、ハーバード・J・テラーが四つのテストを作ったのは、大恐慌の最中の1933年のことである。これを基本政策として倒産した会社クラブ・アルミニウム社の再生に成功し、彼が国際ロータリーの会長を務めた1954-55年度に、その著作権を国際ロータリーに移譲した。爾来、ロータリーでは職業奉仕の「黄金律」として使われることになった。

上記はロータリアンなら誰もが知っておかねばならぬ物語である。

しかし、時代は変遷し、「四つのテスト」を唱和、実践すれば経営が再生するなんてことは考えられないし、また商取引の公正さを測る尺度としても現在の翻訳ではロータリアンの共鳴を得るとは思われないからである。

事はロータリーの「黄金律」に係る問題である。軽々に扱うべきでないことは充分承知している。しかし、ロータリーが「職業倫理」を高めようとしているのは承知しているが、単にキリスト教的倫理観だけで通用する程、現在の社会は単純ではない。

私のような意見が出ることも不可思議でなかろう。諸賢のご叱正を期待したい。

因みに私なりに面白いと思った「四つのテスト」を二例紹介する。

1) パロディ版 「四つのテスト」

1. ほんまでっか
2. あんじょうせんとあかんで
3. なかよやりましよ
4. もうかりまっせ

パロディとして切り捨て難い、説得力が有る。

2) 四つのテスト

事業の立案企画、実行はこれらに照らしてから

1. 嘘、偽りはないか
2. 関係者すべてに公明正大か
3. 信用を高めてより良い関係を築けるか
4. 関係者すべてに有益か

一寸長く、くどくどしいが明解ではある。

以上